

コメント

細見和之

私は大阪府立大学というところで、主にドイツ語を教えています。元来はドイツのユダヤ系の思想を専門にしています。ここ数年こちらの大学にコメンテーターと呼ばれることがあって、何度か寄せていただきました。今度は新しい縁もできました。つまり、3年まえに出た私の本『アイデンティティ／他者性』の一節を、今年度の立命館大学の入試問題にも使っていただいたようなのです。今日の話はその本の問題ともつながってくると思います。

いまみなさんと一緒にネグリをビデオで観ていました。私もこういう形でネグリの映像に接するのははじめてです。独特の雰囲気のある人ですね。新左翼の理論的なリーダーと位置づけられています。イタリアの左翼の一部がテロリズムに行き着いたとき、「黒幕はあいつだ」とデッチ上げ逮捕されたわけです。彼は獄中でも本を書いて、しかも国会議員の選挙に出ると言った。国会議員に当選すると議員特権で訴追されないわけですね。そして、警察に拘束されている状態で選挙に出て、見事当選して、議員特権で訴追を免れる。するとイタリアは法律を変えて議員特権が使えないような状態を作ろうとした。そのとき、ネグリはパリにいて、亡命せざるをえなかったわけです。そして1997年に逮捕覚悟でイタリアに帰還して、やっぱり逮捕されて、昼間は出歩けるけれども夜は監獄で過ごす、そんな生活を送ることになった。かなり特異な、しかしその特異さそれ自体がある解放感を与えてくれるような、そんな存在です。

『帝国』という本に繰り返し登場する「群衆」「多数者」とも訳されている「マルチチュード」「ムルティチュード」という概念に私は違和感がありますので、のちにはそのことを言いたいのですが、一方でネグリはイタリアでまさしくそういう群衆の力を具体的に経験しているのだと思います。彼は国

家権力から「テロリストの頭目」「影のリーダー」と言われて逮捕され、しかも獄中から選挙に出て当選した。そういう民衆の力というものを身をもって知っているわけですね。日本の現実でそういうことがありうるかどうか考えてみてください。

テロリズムの政治犯としてフレームアップで逮捕された人物が、獄中から選挙に出てみごと何十万票を獲得して当選してしまう。そういうことが私たちの日本の空間では考えられないのではないか。逮捕されている、あるいは容疑をかけられているだけで、選挙自体に出られない。法律上どうなのか私は知りませんが、仮に選挙に出ることができても、おそらくネガティブな反応が多いだろう。「裁判で無実であることを証明してから選挙に出るべきだ」とか、そういうまことしやかな話に日本ではなるのではないか。それに対してネグリは拘束されている段階で民衆に審判を仰いだ。そして、民衆が彼を国会議員として選んだわけです。ネグリにはそういう民衆のイメージが具体的にあるのだらうなと思います。そんな印象を持ちながら、しかし彼の「マルチチュード」という概念には違和感も語らざるをえない。全体としてはそういう話になると思います。

いま植村さんからこの本の詳しい内容の紹介がありました。この本をどう評価するかとなると、両面的にならざるをえない。一方で、これはあえてこう語っている本だという評価の仕方ですね。いまある現実を極限まで進めてみて考える。植村さんは「予言の書」と言われましたが、「あえて予言者の立場に立って語っているのだ」というスタンスの受け取り方。そのひとつがたとえば「インターナショナリズムは終わった」という主張です。インターナショナリズムどころか世界がグローバルに「帝国」として成立している。そんなときに「ローカルなところにこだわる闘いには意味がない」とネグリは言いま

す。それに対していまのところ現実はそのようになっていない、と反論することができる。さまざまな局面でナショナリズムが強化されさえしている現状において、インターナショナリズムを掲げることは十分その意味を失っていない。

実際はネグリ自身のなかで現状認識か予言かという問題は不分明に重なりあっているのではないか。ネグリが「国境を越える」というとき、それは国家間の具体的なバリアを前提にした言い方ですね。それに対して「ひとつの帝国」という言い方をすると「そもそも国境がない」ということになるわけです。そこでは、いわば現実の国境と観念的な国境、その国境を越えてゆく現実の越境と観念的な越境という二つの問題が生じる。

一方で、具体的な身体を持った人間は必ず位置を移動しないとムーヴしたことになる。モバイルといっていくら軽快さを強調しても実際に動かないと話にならない。それに対して情報産業、コンピュータを強調すると、そもそも動く必要がなくなるわけですね。身体をある場所から別の場所に移動させるという移動のイメージと、すでに情報は向こうに行っている、その感覚が両方重なっている。私の情報が向こうに行くなら、私の身体が現に向こうにあるのと同じくらい、私はリアリティをもって存在しているというレベルの話と、実際に身体を動かさないと仕方がないという二つのレベルが、ネグリのなかでもあまりすっきりしていない。現に人々が移民や難民として国境を越えて移動しているという現実の問題と、情報としての私たちはそもそも身体を動かす必要がなくなっているという二つの話が、重なりあってしまっているわけです。

ある意味では現実的な問題と観念的な問題、あるいは現実的な移動と情報の移動。そのうえでネグリは、その移動の感覚を、瞬時に身体を持たずに行われる移動の方に、どこか引き寄せながら語っているところがある。この本の後半では、リアルなものとはバーチャルなものとの対立が語られて、最後はバーチャルなものがどうやってリアルになるのかという話で終わっています。バーチャルな移動とリアルな移動の差異が、いつか本当に無化されるのか。無化する方向にどんどん加速させていくような形ですべて

がうまくいくのかどうか。そういうあたりの問題が、現実にはいろんな場所に出てくるだろうと思います。

私がこの本を読みながら、最初に強い違和感をもったのは、これは植村さんも触れられたことですが、アイデンティティ・ポリティクスとか「差異の政治学」に対するネグリの激しい苛立ちです。80年代以降、あるいは90年代以降、あたかも政治の主題がマイノリティをめぐるポリティクスのところに行っている。私からするとネグリはいかにも古典的な左翼だと思うところですが、政治の問題が「少数者の権利擁護」の問題で尽きるような語られ方、政治があたかもそういう場面で全部語られてしまうことへの苛立ちがネグリにはあるのだろうと思います。もちろん、ネグリも少数者の権利擁護は大事な問題だと考えているのですが、もっと政治はグローバルな問題を孕んでいて、世界がそもそも全体としてどうなっているのかという問題を抜きに、アイデンティティ・ポリティクスとか差異の政治学で政治の言説が終わってしまうことに対して、強い苛立ちがあるのではないのでしょうか。

非常に雑駁な言い方をすると、「政治はもっと大きいことだ、人が、群衆が、大きく動いて世界を根本的に変えるものだ」、そういうイメージでネグリはやはり政治を捉えているのではないかと思います。それは私なんかと思う政治とはだいぶ違う。私は1980年に大学に入った世代ですが、80年以降、大学に入って現状を批判しようとする、徹底的に少数者だった。どんな大きな政治を語ってもそれこそはじめからマイノリティのポリティクスですよ。自分自身、そういう言説を語ることで絶対的に少数者の位置に置かれてしまう。そういうなかで、ものを考えざるをえなかった人間からすると、ネグリの問題設定は昔ながらの「大文字の政治」という感じがします。

そもそも大文字の政治を抜きに世界が語れるのか、そういう問いは可能だと思いますし、アイデンティティ・ポリティクスや差異の政治学が世界に現に起こっている事態をグローバルにどうとらえているのかという問題は、それ自体まさしく「差異の政治学」の一部でしょう。にもかかわらず、「差異」

こそいま「帝国」が価値として情報として世界にはば撒いている最大の「商品」なのだから、差異の政治学に携わっている人々は「帝国」のまさしく手先・先兵にはかならない、とネグリたちは悪罵に近いものをぶつけています。これは相当乱暴な議論だと思います。さらに、その差異の政治学の源流と見なされるポストモダンの論者たちを批判する際には、ボードリヤールからデリダまで一緒くたにして「彼らはみんな啓蒙主義が嫌いなのだ」と言うわけです。啓蒙主義に対する敵対という一点で全部一括りにしてしまう。メチャメチャな議論だと思います。

さてここで、最初に申し上げた「マルティチュード」にこだわりたいと思います。そもそも「マルティチュード」という概念はスピノザに由来していて、そのことはネグリも認めています。もちろん、ネグリはスピノザ論も書いていますね。そもそもネグリの果たした大きな功績に、マルクスの議論をスピノザまでいったん遡らせて、さらにスピノザの理論を現在まで引っ張ってきて政治を問いなおす、という仕事があります。スピノザというと汎神論、つまり超越的な神を排そうとした哲学者ですが、ではスピノザは政治学者としてはまずもって何を行なったのか。やはり「超越的なものを全部排する」ということをやったわけです。君主制はまさしく「君主」という超越的なものを設定するわけですが、それに対して神もいない、君主もいない、分かりやすく言うと、それが民主制の基本ですよね。すべては民衆の内部、民衆が満たしている内在的な空間で物事が動いていく。いっさいの超越的なものなしに民衆だけが作っている空間が本来の政治空間なのだ、というイメージです。そういう意味で、デモクラシーの原理をスピノザが強力に打ち立てた。

その「超越なき内在の世界」という政治空間としてスピノザが開いたものを、ネグリは現代の議論にまで引っ張ってくる。そしてある意味では彼の言う「帝国」が、ついにそういうスピノザの空間を、裏返しの形かもしれないが、実現している。一切の超越を排して「帝国」のもと、しかし「帝国」に対抗しながら、「マルティチュード」が自らの欲望と身体、さらには「愛」で、その政治空間を満たすこと

が可能になる。最後に「愛」が出てくるのもきわめてスピノザ的ですね。そういう「帝国」という政治空間を満たしているあるべき「マルティチュード」の姿をまた、「単独的singular」なもので「複数のmultiple」なものだと、彼は繰り返し語っています。

しかし一方で、スピノザの語っている「マルティチュード」は元来否定的な対象でもありました。哲学概論や高校の倫理社会でも出てくる話かもしれませんが、スピノザは「エチカ」で3つの認識を区別しています。第1種の認識は「イマジナチオ」、よく言うと想像力・表象力ですが、悪く言うと迷信です。迷信に支配されている位置にある認識。第2種の認識は「ラチオ」、合理性、計算合理性で、科学的な認識によって世界を見ていく立場。最後が直観知「インテュイチオ」。この直観知がいちばん分かりにくいのですが、とりあえず、科学的なラチオすら超えた立場で物事を直観的にとらえる知のあり方です。

スピノザが「エチカ」などで語っている「マルティチュード」「マルチチュード」「多数者」「群衆」というのは基本的にイマジナチオに支配された人たちです。表象力、悪く言うと迷信に支配された人たち、神が世界を創造したとか、歴史は神の世界計画に基づいて進行しているといった「物語」によって支配されている人たちです。そんな彼らを、それでもせめてラチオに導かれるのと同じような振る舞いにどうやったら導けるか、そういう話をスピノザはしている。インテュイチオにはとうてい行けない。ラチオにも行けない。いつもイマジナチオに支配されている、その群衆、「マルティチュード」にどうやってせめて準合理的な振る舞いをさせることができるか、そういうコンテキストに置かれた議論です。

そういう意味では、スピノザにとって「マルティチュード」は必ずしもいいイメージではなかった。つまりスピノザは、君主制と民主制のあいだで揺れながら、そのなかで敢えて民主制の原理を打ち出した人であって、「群衆」のネガティブな面も十分見すえていた。彼が非常に高く評価していた当時の政治家にヤン・デ・ウィットという友人がいましたが、デ・ウィットは政治的な抗争の過程で、それこ

そ暴徒と化した「群衆」に虐殺されてしまいます。それがスピノザの基本的な政治体験でもありました。

ただし、こんなことは誰でも知っていることで、私がここであらためて言うまでもないはずのことで、しかし、誰も「マルチチュード」との関わりでこのことを口にしないのが私にはとても不思議なので、あえて言わせていただきました。ネグリが「マルチチュード」を、君主制を排し、超越的なものをいっさい持たないスピノザ的内在の世界として考えているとすればどうなるのか。スピノザすら「マルチチュード」が持っている危険な側面をとらえていたわけです。ネグリはその点、かなり曖昧ではないか。

じつは日本語の翻訳にも違和感があって、植村さんがさきほどから「群衆」と訳されていて、そうだなと思ったのですが、「多数者」あるいはそのままカタカナ表記で「マルチチュード」「マルティチュード」などと言われると、とても新しい概念、謎めいた概念のような印象を受ける。けれども、端的に言うところ「大衆」とか「群衆」だと思います。群衆は通りに群れている感覚がありますから、通りに群れているのではないイメージだと「大衆」になる。そこで、「大衆」と言ってしまったとたん、「何だ、これは大衆社会論なのか」という違和感が素朴に出てくると思います。いかにも素朴だけれどもそういう違和感はあるべきだと思う。しかし、これもあまり語られない。

「マルチチュード」とか「多数者」などとよく分からない言葉で言われると、これはきっと新しい概念で、もちろん大衆などとは全然違うものだろうと思ってしまう。「民衆people」とは違うとしきりに強調されているのですが、著者たち自身この本のなかで「マルチチュード」を「大衆mass」と言い換えている箇所も実際にあったと記憶しています。具体的には、植村さんが言われたように「移動して越境していく労働者」というイメージが確かに背景にありそうですが、ネグリに言わせると「帝国」のもとではすべての成員が「搾取」されているわけですから、私たちも「マルチチュード」の一人のはずです。中心なき「帝国」ですから、私たちもい

くらでも「帝国」の弱いところにアクセスできる。それなら「大衆」という概念とどこが違っているのか、全然分からないですね。そんなことを思っていると『現代思想』に掲載されているインタビューで、共著者のハート自身が「マルチチュードの概念を明確に規定できなかったのが、あの本の限界だ」という趣旨のことを言っている。

それこそ「マルチチュード」を「多数者」と訳すなら、反対は「少数者」ですよ。それでは、ネグリの語っているのは結局のところ「マジョリティの政治学」なのか、ということになります。そのあたりの問題をもっときちっと詰める必要がある。マジョリティの政治学であるなら、マジョリティが世界を作っているのであって、「帝国」を構成しているマジョリティの想像力が世界を変える——そういう話になるのか。非常に冷めた目で大局的に歴史を見れば所詮それが現実なのかもしれない。そうなのかもしれないけれども、そういうマジョリティがその過程で実際に何を行なってきたかを考えると、薄ら寒い思いすら湧いてくる。

前回あたりには、ジェンダーの話が出てこないという指摘があったようですね。ネグリらの言う「マルチチュード」は結局男性中心ではないのかという議論でもあったようですが、そういう問題とも関わってくる点です。以上、「マルチチュード」という概念への私なりの違和感を、素朴な視点から多少しつこく話してみました。

さて、今日は「インターナショナリズムと全体主義」がテーマですから、全体主義の話もしておきますと、ホロコーストの話とナチズムの話はチラッと出てきますが、「全体主義とは何だったか」という問いかけは、この本には基本的に出てきません。だからこそ「マルチチュード」と全体主義の関係もまたもっときちんと議論されるべきだと思います。私自身は、ファシズムとかナチズムは、ネジの外れた少数者が良識に溢れた多数者をとんでもない暴力的なシステムで管理・抑圧した社会だ、というふうには思いません。ナチズムのもとでは、みなさんもご存知のとおり、「ユダヤ人」をはじめたくさんの人々が虐殺されました。ヨーロッパ全体で600万人とも言われる。しかし、ではドイツのもとで追

害されたのが多数者だったか、ナチズムが迫害したのが圧倒的な多数者だったか。決してそうではないですね。「全体主義」は、少数者が多数者を支配・抑圧するシステムではなく、多数者があるメカニズムをつうじて少数者を徹底支配し、最終的には抹殺するシステムであると考えた方が、むしろ現実によくしている。そういう点では「マルティチュード」、もっと露骨に言うなら「マジョリティの想像力」「マジョリティの力」がそもそもファシズムの問題とどういう切断線を持てるのか、そのことはきちっと議論する必要があるのではないかと。そういう気がして仕方がありません。

もちろんネグリに「要するにこれはマジョリティのことですよ」と言うなら「全然違う」と答えるでしょう。「これはまだ現れていない、潜在的にしか存在しない、未知の力だ」とか言うかもしれない。しかし、現実にはマジョリティの問題は政治のなかで非常に危険な側面をもったものとして考えざるをえない。スピノザは「君主制からデモクラシーへ」という決定的な流れを先駆的に作った人かもしれないですが、私たちはデモクラシーから、場合によるとファシズムへ、あるいはスターリニズムへという歴史を知ったうえで育ってきている。君主制という状況のもとでデモクラシーの原理を打ち出したスピノザのマルティチュードを、しかもスピノザにはそなわっていた批判的な視点抜きに私たちのファシズム以降の時代にそのまま持ってくるのは相当むりがある、と言わざるをえない。

この本自体がどういう状況でしかも「共著」として書かれたのか、私はよく知らないのですが、ともあれネグリはマルクス論とスピノザ論を獄中で執筆した。同じように獄中で膨大な執筆活動を続けた人物に日本では永山則夫がいます。名前ぐらい聞かれたことがおありでしょうか。彼は19歳で4人の人を射殺してしまって、獄中でたくさんの本を書きましたが、1997年に死刑執行されてしまいました。その永山則夫が獄中から語ったことのひとつがまさしく「ファシズムは多数者による少数者抹殺のメカニズムだ」ということでした。永山則夫は「世界で初めてファシズムのメカニズムを解明した天才的理論家は私だ」というようないかにも傲慢な言い方もする

のでやっかいですが、彼が獄中で語ったファシズムのイメージには、彼自身、少数者として辛酸をなめさせられた体験も含まれていたと思います。ネグリの獄中体験を踏まえて紡がれたであろう「マルティチュード」をめぐる問題と、同じように獄中で永山が語った「ファシズムは多数者による少数者抹殺のメカニズムだ」という指摘を、さしあたり獄外で「自由に」議論できる私たちは、どう交錯させることができるのか。そんなことも私は考えてしまいます。

最後に、「マルティチュード」——「多数者」「群衆」「大衆」いろいろな訳語を充てることのできるわけですが——という問題設定の積極的な意味、いわばその批判的機能という側面を考えて、思ったより長くなってしまった私のコメントを終えたいと思います。

つまり、いまの日本の状況では、そういう「マルティチュード」はいったいどこにいるのか、そう批判的に問いかけてみることです。いくらかカリカチュアライズした言い方をすると、こういうことも言えるのではないかと。小泉首相の人気の非常に高いかと思うと、拍子抜けするほど低落したりする。あるいは田中真紀子さんに人気が集まっているかと思うと、突然みんながそっぽを向いたりする。そのメカニズムを支えているのは何なのか、あるいは誰なのか、ということです。

マスコミが支配しているという部分はかなりあると思いますが、ではマスコミは自律的に自分の報道活動を行なうことができているのか。とりわけ良識的な人々は、マスコミが世論を作っていると言うかもしれませんが、ほんとうにそうでしょうか。マスコミはマスコミで「世論」の雰囲気を探っているというのが正直なところではないでしょうか。それなら、誰がこの問題に関する「主権者」なのか。マスコミは決して自分たちが主権者だと思っていないと思います。新聞も週刊誌も要するに売れないとおしまいですから。どうすれば購買者が飛びついてくれるか、まるで天気をうかがうように気にしている。では自民党はどうか。彼らが浅ましいほど世間の支持率を気にしていることは、周知のことですね。当選の可能性さえあればどんな政策転換も約束しかね

ない。

小泉人気を支えたり、凋落させたりする現象を形づくっている、その際の「主権者」とはいったい誰なのか。ある意味では不在としか言いようがないかもしれない。そこに成立しているのは、誰もが被害者と思っているけれども、誰もが同時に加害者でもあるような主権のあり方、ではないか。これは日本国内の話ですが、ネグリの言う「帝国」を構成している「マルティチュード」のあり方とかなり近いところがあるのではないのでしょうか。

誰もがその中の「構成員」であり、誰もが「構成的な力」を持っていて、しかも誰もが「構成された」

ものとして自分を意識している。「構成するもの」と「構成されるもの」が単純に敵と味方に分かれないう形で、場合によると同一の人間のなかに並存・混在してしまっている。そのとき、私たちは自分のどちらのあり方に賭けるのか。同じ人間のなかに「構成された」部分と「構成する」部分がせめぎあっていて、そのなかで少なくとも構成する側でもあることを自覚せよ、そして自らの構成する力、すなわち変革する力に賭けよ——そういう提起というかメッセージを、『帝国』という本はあらためて私たちに突きつけているのかもしれない。これくらいで私のコメントを終わらせていただきます。